

令和 6 年 4 月 20 日現在

機関番号：33914

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12794

研究課題名（和文）ヘーゲルによるカント倫理学批判を再考する

研究課題名（英文）Reconsidering Hegel's Critique of Kantian Ethics

研究代表者

山蔦 真之（Yamatsuta, Saneyuki）

名古屋商科大学・国際学部・教授

研究者番号：50749778

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては近代ドイツ哲学を代表すると言われる二人の哲学者、カントとヘーゲルの比較研究が、具体的にはヘーゲルによるカント倫理学の批判を分析することが試みられた。今日の倫理学においてとりわけカントの影響力は強く、基礎的な倫理学の研究から応用倫理学の現場等、様々な局面においてその考え方は使われている。本研究が明らかにしたのは、そのような影響力の強いカント倫理学におけるさまざまな問題をヘーゲルは指摘しており、その洞察は今日の倫理をめぐる議論においても未だ有効であることであった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究においては日本語、英語の両言語による学会発表と論文発表が複数行われた。日本語においては日本の哲学研究の全国研究史である日本哲学会の期間刊行誌を含めいくつかの学会誌において、これまで十分には研究がされていなかったヘーゲルのカント倫理学批判をめぐる分析を発表することができた。国際的な研究としても、カント研究を代表する国際的な学会や学会誌において、世界的な研究状況を見ても未だ未開の領域であるヘーゲルのカント批判を発表することができた。

研究成果の概要（英文）：In this research two representative figures of modern German philosophy, Kant and Hegel are compared; especially Hegel's Critique of Kantian ethics is analyzed. Kantian ethics is one of the main sources of contemporary ethical discourse and it has not only historical, but systematical meaning that the "flaws" of Kantian ethics is cleared. The research tried to show that Hegel has distinctive insight into the problem of Kantian ethics.

研究分野：哲学

キーワード：カント 倫理学 ヘーゲル

1. 研究開始当初の背景

ヘーゲルによるカント倫理学の批判は、それ自体はよく知られた論点であり、とりわけカントにおける「定言命法」をヘーゲルが「無内容」「トートロジー」と批判したことはよく知られている。しかしながらヘーゲルのカントの両哲学の全体像を見た上で、ヘーゲルのカント批判がいかなる体系的な根拠をもってなされているのかを分析した研究は、とりわけカント研究の側からはなされていないという研究状況があった。

2. 研究の目的

これまでに十分顧みられていなかった領域においてヘーゲルのカント批判のさまざまな局面を分析することで、ヘーゲルのカント倫理学批判が本来はどのようなものであったのかを分析することが本研究の目的であった。これまでにすでに言われていたカントの道徳法則が「無内容」「空虚」であるといったヘーゲル批判、あるいはまたカント倫理学が間主観性に十分に着目していない、といったヘーゲルの批判とは異なる、より両者の哲学に内在的な仕方でのカントとヘーゲルの比較分析をすることが目的である。

3. 研究の方法

さまざまな局面や概念を通じてカントとヘーゲルの比較が行われた。すでに発表された学会発表および研究論文で扱われたテーマとしては、1, 美的理念、2, 知的直観、3, 最高善、4, プラトン受容がある。これらの諸概念・主題を通してヘーゲルのカント批判を概観することで、これまでの研究では明らかにされてなかったヘーゲルのカント批判の実質的な内容を明らかにすることが試みられた。

4. 研究成果

研究の方法で述べられた様々な局面のヘーゲルのカント批判のそれぞれにおいて学会発表や論文発表がなされた。

1, 美的理念について

カントに続く世代はカントの著作である「判断力批判」やそこで述べられる「美」の観念を通じてカント哲学をさらに発展させる、あるいはそれを乗り越えることを目指していたことが知られている。ヘーゲルもまた『判断力批判』における「美」や「美的理念」の解釈を通じて、カント哲学における理論と実践の統一や新たな思考の可能性を探っていた。本研究ではそのようなヘーゲルによるカント美学の解釈の妥当性や、あるいはカント哲学における美的理念の位置づけを改めて問い直した。

具体的研究成果としては以下のものがある。

・学会発表 2021年11月 日本カント協会第46回大会
「ヘーゲルのカント批判を再考する 美と理念、「超感性的なもの」、あるいは「絶対的なもの」について」

・学会発表 2023年8月 The 10th Multilateral Kant-Colloquium
“The Aesthetic Idea and the Supersensible in Kant and Hegel. The feeling of beauty in the system of philosophy”

・論文 「ヘーゲルのカント批判を再考する 美と理念」(日本カント協会『日本カント研究23』二〇二二、一六五—一七五頁)

2, 知的直観について

カント哲学においては「知的直観」は人間主体には不可能な能力であり、倫理学においてもいかなる役割も果たしていない。しかしカントに続く世代はカント倫理学の乗り越えるためにこの「知的直観」の可能性を模索したことが知られている。ヘーゲルもまたその若い時代に「知的直観」に傾倒しており、その視点からカント哲学を批判している。しかし成熟したヘーゲルは「知的直観」の概念から離反し、それとは別の仕方でのカント哲学の乗り越えを試みることになる。この領域においては「知的直観」をめぐるカントとヘーゲルの哲学

がどのように対立しているのかを示すことが試みられた。

具体的研究成果としては以下のものがある。

- ・学会発表 2020 年 11 月 日本カント協会第 45 回大会
「ヘーゲルのカント批判を再考する 知的直観と哲学の方法」
- ・学会発表 2022 年 6 月 Humboldt Kolleg “Problem of Reason”
“Intellectual Intuition and Ethical ‘Ought’”
- ・“Intellectual Intuition as New Practical Reason? Hegel’s Critique of Kant’s Ethics Reconsidered” Kantstudien-Ergänzungshefte 2024 予定

3, 最高善について

ヘーゲルのカント倫理学批判はカント倫理学における「定言命法」の批判であると通常は理解されている。しかしながら『精神現象学』や『論理学』にはそれとは別の、本研究が観るところではより重要なカント倫理学批判が展開されており、それはカント倫理学における「最高善」の概念に対してヘーゲルが行った批判である。この批判はカントとヘーゲルの哲学全体、あるいはそれらの形而上学的な差異が反映されており、それこそがヘーゲルのカント倫理学批判の中心であったとすることを本研究は主張した。

具体的研究成果としては以下のものがある。

- ・学会発表 2021 年 5 月 日本哲学会第 80 回大会
「ヘーゲルのカント批判を再考する 「当為」のゆくえ」
- ・論文「ヘーゲルのカント批判を再考する 「最高善」と「無限の進歩」」(日本哲学会編『哲学 74 号』二〇二三、二二六 二三九頁、査読有)

4, プラトン受容

カントとヘーゲルは共に哲学の歴史に対して独自の見方を持っていた哲学者たちである。歴史的な知見と体系的な思考がどのように関係をするのか、そのことは今日哲学研究に従事する者もまた避けては通ることのできない問いである。本研究では両者のプラトン哲学に対する態度を比較することで、両者がどのように哲学の歴史というものに向き合い、それを自身の哲学を発展させるために使っていたのか、そのことを明らかにすることが試みられた。

具体的研究成果としては以下のものがある。

- ・学会発表 2023 年 7 月 東京都立大学哲学会 46 回大会
「カントとヘーゲルにおけるプラトン受容の問題」
- ・論文 「カントとヘーゲルにおけるプラトン受容の問題」東京都立大学哲学会『哲学誌』2024 年予定

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山蔦真之	4. 巻 23
2. 論文標題 ヘーゲルのカント批判を再考する 美と理念	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本カント研究	6. 最初と最後の頁 165-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山蔦真之	4. 巻 74
2. 論文標題 ヘーゲルのカント倫理学批判を再考する	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 哲学	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yamatsuta Saneyuki	4. 巻 13
2. 論文標題 The Concept of Passion in Kant's Anthropology: Reconsidering the Relationship between Anthropology and Critical Ethics	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The Court of Reason Proceedings of the 13th International Kant Congress	6. 最初と最後の頁 1209-1216
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/9783110701357-117	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 山蔦真之	4. 巻 62
2. 論文標題 否定の力・制限の力	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 哲学誌	6. 最初と最後の頁 43-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山蔦真之	4. 巻 69
2. 論文標題 和辻の「個人」論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 倫理学年報	6. 最初と最後の頁 19 - 29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 山蔦真之
2. 発表標題 Intellectual Intuition and Ethical "Ought"
3. 学会等名 Humboldt-Kolleg Problem der Vernunft. Kant im Kontext (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山蔦真之
2. 発表標題 ヘーゲルのカント批判を再考する 美と理念、「超感性的なもの」、あるいは「絶対的なもの」について
3. 学会等名 日本カント協会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山蔦真之
2. 発表標題 ヘーゲルによるカント倫理学批判を再考する
3. 学会等名 日本哲学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山蔦真之
2. 発表標題 ヘーゲルのカント批判を再考する
3. 学会等名 日本カント協会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山蔦真之
2. 発表標題 ヘーゲルのカント批判を再考する
3. 学会等名 日本哲学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関